

* 序 *

俺の妹は、可愛いが、無愛想だ。

俺の妹は、女子高生で、三つ年下だ。

俺の妹は……………

「兄さん、早くして」

妹の呼ぶ声を聞きながら、朝食の残りをかき込む。

玄関に向かえば、頬をふくらませながらすねたように俺の方をにらむ妹と、その傍らに置かれた無骨なアルミの松葉杖。

ほころびかけの花のように清楚な制服姿から伸びるすらりとした手足に、無骨なそれはあまりにも似合わない。

「よし、足出せよ」

「ん」

玄関の段差に座る妹の学校指定のソックスに包まれた足を取り、靴を履かせてやる。歳不相応に細い……のだろうか。彼女以外の女子高生の足に触れたことがない俺にはよく判らない。

俺が靴を履かせている間、妹は頭の横で二つに結んだ長い黒髪を黙っていじくっていた。俺には違いがほとんどわからないけれど、きれいに結うにはいろいろと苦勞があるそうだ。癖が

取れない日にはさんざん愚痴を聞かされるものだけど、今日はきっと上手くいっているんだろう。

「ほら、立ってって」

「ん」

妹の左手を取って立ち上がらせる。俺がそのまま両手で左腕を取ると同時に、妹は右手で松葉杖を握る。

「結花（ゆか）、ちょっと重くなったんじゃないか？ 二の腕もぶよぶよしてるし」

「……うん」

ぴくりとも表情を変えず、妹が俺の足を踏みつける。まったく、冗談の判らない奴め。

家の前の駐車場までのアプローチを二人三脚の要領で歩き、助手席のドアを開けて妹を座らせてやる。

「兄さん、今日もお願ごと」

運転席に乗り込めば、松葉杖を抱えた妹が助手席からこちらを見ないままぶっきらぼうに言った。

「シートベルト締めたか？ よし、行くぞ」

俺の言葉に妹が無言でうなずくと同時に駐車場から出る。妹の高校まで十五分。校門の前で妹を下ろし、それから大学へ向かえばちようど一限の開始と同じくらいになる。

街を見下ろす高台。そこを上る急な坂の、頂上から少し降りた所に俺たちの家はあった。

子供の頃は自転車でどれだけ速く坂を駆け下りられるか競争

して遊んだものだけど、今となってはただ面倒くさいだけだ。頼杖をついて窓の外を眺める妹を乗せ、俺はゆつくりと坂を下る。

坂道の終点、T字路の向こう側には、すぐそばを流れる川の水面が初夏の朝陽で輝いていた。

そういえば。

今さら言うまでもないが、俺の妹は、片脚が不自由だ。

* 1 *

「晃司、晃司!! またそうやってぼうつとして。妹さんのことでも考えてたんでしょ」

午前中最後の語学の講義が終わり、ざわつく講義室。降り出した雨でぼやけるキャンパスの風景を窓越しに眺めていると隣の席から頬をつつかれた。柔らかい指がそのまま俺の頬をこね回す。

「何か言ってくれないと、私も困るんだけどな」

「……佳央理（かおり）、お前がそんな事してるから喋れないんだろ」

学部が違うから、来年になつたら授業も被らないしキャンパスも完全に離れちゃうし、と寂しげな佳央理。

「妹の世話で時間が取れないのはすまないと思ってる。でも、看護実習と言ってもせいぜい一ヶ月くらいだろう？ そのくらいの間なら別にいいじゃないか」

俺の言葉を聞く佳央理の表情が次第に曇ってゆく。何かまずいことでも言っただろうか。

「……まったく、このシスコンは」

一言だけ呟いた後、何かを決心したかのように佳央理は急に席を立った。

「ちょうど週末だし、今日は私に付き合いなさい!! 雨が気になる？ 予報通りなら夕方には止んでるから大丈夫!! 晃司はね、もっと妹離れしないとダメ。私がせっかくそれに付き合っただけようって言ってるんだから、感謝しなさいね!？」

「おいおい……」

こうなった時の佳央理はもう誰に止められないのは、俺は付き合いたいからこの一月ほどで痛いほど理解している。

だが、この積極性がありがたくもある。妹の世話にかまけて人間関係を広げなかった俺にも、顔の広い彼女を通じて大学内の友人が随分と増えたものだった。

「晃司? どうしたの?」

妹に送る連絡のメールの文面を考える俺を、佳央理が不審そうに見つめる。

「えへ、ばれた?」

ようやく離された指と同時に振り向けば、可愛らしく小首をかしげた俺の恋人がいる。

「すぐ隣の付き合いたての彼女を無視して他の女の子のことを考えてたら、そりゃ私だって怒るよ。むしろこのくらいで済んで幸運だと思っただ方がいいよ?」

「それが妹でもか?」

「もちろん!!」

胸を張って佳央理が答える。俺より一つ歳上のはずなのに、こうしてすねている時はとても子供っぽいのが、佳央理の自分では気付いていない特徴だ。

背は低けれど着やせするグラマーな体型に、肩に届くか届かないくらいの短めの髪。容姿では全く共通点がないのに、こんな時の佳央理を見ているとどうにも妹を思い出してしまう。

「上の空になっちゃって。雨が降ってるだけでそんなに心配になるものなの?」

「前にも話しただろ。妹は交通事故で脚が悪いんだよ」

「でも、一人で登下校くらいはできるんでしょ? 晃司が送り迎えするのは毎日じゃないだし」

少しだけ眉をひそめ、佳央理は続ける。

「夏休みに入って私の看護実習が始まったら会ってる暇なんてなくなるから、その前にいろいろやっておきたかったのに……」

「なんでもない。じゃあ、行くか」

こうやってすぐに妹のことを考えてしまうからシスコン呼びわりされるんだろうなと苦笑し、俺は佳央理の後を追った。

* * *

『端元』という表札の文字が、自分の姓だと納得できるようになったのはいつのことだろうか。

「……ただいま」

誰もいない家に向かって虚しく声をかける。

ため息をつきながら松葉杖を放り出し、靴を脱いで壁の手すりを掴んで何とか立ち上がる。いつも兄さんに補助してもらっているに慣れているから、たまに一人で帰ってこるとちょつと困る。兄さんが迎えに来てくれない時の帰りはバスに乗っているけど、遠回りで時間が掛かるしバス停は家から遠いし疲れるばかりだ。

「それにしても妙よね、うちって」

我が家の内装を眺めて私は思わず独り言を漏らす。

階段から廊下から、ありとあらゆるところに私のために設置された手すりや、本来のフローリングの床と淡い色の壁紙に全く合っていないのは見えていて笑えるくらいだ。あまりにも統一

感が無さすぎて、元よりこんなデザインなのかと勘違いしそうになってしまふ。

といつても、私はこうなる前の家を知らないのだけど。

脚をこんな風にした交通事故。小学三年生の時だから、もう7年になる。あの事故で、同時に私はそれ以前の記憶も失った。覚えている一番古い思い出は、病院のベッドで目が覚めた時に傍らにいた年上の男の子のことだ。自分の兄だと紹介された彼は、時間さえあれば付きつきりで私の世話をしてくれた。

なぜ母さんしか見舞いに来ないのかを疑問に思う頃には、既に離婚が成立していた。おかげで私は父親の顔を写真でしか知らない。

長期の入院とリハビリを終えて家に帰った時には、既に我が家は母さんによって手すりだらけの歪な家に改装されていた。兄さんにはまた違う思い出があるようだけど、私にとつては知っている我が家の姿はこれが全てだ。

そういえば、以前から不仲だった父が家を去る決定的なきっかけになったのもこの偏執狂じみた母さんの仕業が原因らしい。

「こうなる前の家でも、きつと私は暮らしていたのよね」

疑問を声に出してしまい、ちよつと恥ずかしくなる。最近一人きりで家にいるのが多くなつたせいか、独り言が増えたみたいだ。

こんな時に兄さんがいれば、お前は何を言つてるんだ、そん

なの当たり前じゃないかと返してくれるのに。

病に倒れた母さんがあつけなくこの世を去つてしまつてからもうすぐ一年になる。それからずつと、私達兄妹はこの家で二人きりで暮らしていた。

何はともあれ、リビングで兄さんが大学から帰ってくるのを待とう。うん、それが一番だ。

それならお茶でも入れようか。この前に——で新人荷したあの茶葉、兄さんに感想を聞いてもらうのも良いかも。

とりとめもなく広がる私の思考を、携帯電話のバイブレーションが遮った。電話を取り出せば兄さんからのメールだ。

「佳央理と遊びに行くことになった。今日は泊まるので夕食は要りません」

ため息をついて、携帯電話をしまふ。誰もいない家の中が、急に広くなつたように感じた。

つまり、私は週末の夜をこの家で一人寂しく過ごさなければいけないということだ。

早瀬佳央理さん。一月ほど前に付き合いだした、兄さんの恋人。私が一人きりで過ごすようになった原因。夕食が要らないくらい遅くなるつて、きつと夜も二人で……

そこまで想像して、私は首を振つて脳裏に浮かんだ想像を打ち消そうとする。

だけど、いくら努力しても兄さんと早瀬さんのことが頭から離れない。そのまま私は、眠れない夜を過ごしたのだった。

玄関で靴を履かせてやつたり、学校へ送り迎えしたりする以外に、俺が妹を助けてやつていることがもう一つある。

「兄さん、入つて大丈夫よ」

自分を呼ぶ声に応じて脱衣所のドアを開ければ、バスタオル一枚で椅子に腰掛け俺を待つ妹がいる。こぼれてくる髪が気になるのか、アップにまとめた頭にしきりに手をやるその無防備な様子に兄として多少の危機感を覚えなくてもない。

「お前、布一枚だけで男の前にいるんだぞ。もう少しこう、恥じらいとか、危機感はないのか？」

「今さら恥ずかしくてどうするの？ 昔は裸で一緒にお風呂に入つてたし」

「あれはほんの子供の頃だろう？ ……まあいい。ほら、腕貸せよ」

「ん」

差し出された腕を取り、肩を貸して立ち上がらせる。

いつもしているように両手で左腕を支え、浴室のドアを開けて二人で中へ。配管やら何やらの関係で改装ができず、どうしても段差を解消できなかった脱衣所周りは俺が妹を家の中で介助してやる数少ない場所の一つだ。

「ありがと」

浴室の中の椅子へ下ろしてやれば、言葉すくなく妹が礼を言う。

脚を悪くしたばかりの頃はお互い子供だったのでこのまま一緒に入つたものだけど、さすがにこの歳でそれは無理だ。裸でじゃれ合いながらお湯を掛け合つたりしていた頃があったのが信じられない。

「じゃあ、外で待つてるからな。出る時には声をかけてくれよ」

「ん」

「あんまり長く入つてるとのぼせるから気をつけろよ。……呼んでも返事がないようだったら踏み込むぞ？」

「ん、わかつた」

どうせ俺の言うことを聞かないであろうこともわかりきつた上で、それでも一応は注意してやる。それにしても、どうしてこう女の風呂は長いのかね。何をやってるんだか。

「あんまり長く入つてるとのぼせるから気をつけろよ。……呼んでも返事がないようだったら踏み込むぞ？」

「ん、わかつた」

ドア越しの兄さんの声に返事を返しながら身体を洗う。片足があまり動かなくても椅子に座っていれば何とかなるものだ。

昔は兄さんと一緒に入つて、支えてもらつたり洗つてもらつ